

アルフレッド・シュエッ 著  
齋藤博・岩脇リーベル豊美 共訳  
▶ 報復の連鎖  
権力の解釈学と他者理解  
2・20刊 四六判390頁 本体3500円  
学樹書院

# ヨーロッパの哲学史、特に解釈学の伝統の中に 他者理解という問題解決の可能性を見出す

具体的な社会領域へと考察を広げながら、理解という実践的な要請のもとに思想史を組みなおす

## 堀内進之介

権力という言葉が意味する  
ことは論じる人によって様々  
である。本書の著者は、権力  
を他者理解そのものの中に見  
出す。どういふことか。人が  
権力を求める時には、他人と  
のかかわりにおいて、暴力的  
危うさが常につきまとう。し  
かし、その場合、人が向き合  
っていると思っている他者と  
は誰なのか。むしろ、他者が  
何者であるかが分らないか  
らこそ、人は暴力的な支配へ  
の誘惑に身を委ねてしまうの  
ではないのか。もしも、そう  
だとすれば、問われなければ  
ならないのは、他者に関する  
知―他者理解という問題―、  
人間がどこまで取り組むこと  
ができてきたのか、あるいは、  
できなかったのか、そして、  
問題を解く糸口がどこにある  
のか、といったことだろう。「理  
解の問題には、他者への関係  
を暴力沙汰で解決するか、あ  
るいは他者を認め評価する関  
係をつくるか、を解くための  
鍵が隠されている」(139  
頁)のだ。

本書はヨーロッパの哲学  
史、特に解釈学の伝統の中に  
他者理解という問題解決の可  
能性を見出す。だが、解釈学  
の中でも他者理解の問題への  
態度は様々だ。著者によれば、  
ハイネカー、そしてそれに続  
くカフマーは、他者理解から  
他者が欠落した理解モデルを  
立ててしまった、という。彼  
らにとって理解とは、「個人  
の実存」あるいは「共感と友  
情の絆」に行きつく営みでし  
かない。著者はそうした態度  
に満足しない。彼が、解釈学  
の伝統の中で高く評価するの  
が、G・H・ミードの議論だ。  
ミードは、人が他人と出会う  
たときに、相手の視点に立

うとすることの重要性を指摘  
する。もちろん、この役割取  
得role-takingが誤謬、思い  
込みすぎない可能性は十分  
にある。だが、人は対話の中  
でこれを洗練させることがで  
きる。洗練された視点は、一  
般化された他者、さらに普遍  
化された他者となり、人間の  
理解と対話の可能性を切り拓  
く。だからといって、ミード  
の議論も問題がないわけ  
ではない。著者は、普遍化され  
た他者に至るプロセスへの素  
朴な期待、つまり人々の合意  
可能性を安易に信じるミード  
の議論の危うさを指摘する  
(1章)。

これはミードだけの問題に  
とどまらない。著者は、多くの  
思想家の間の理論的な緊張関  
係の背後に、普遍化された他  
者とその理解をめぐるミード  
の希望と困難を重ね合わせ  
る。「私の視点からの一般化  
・普遍化に一貫して懐疑的だ  
ったフッサールと、「私の視  
点」それ自体の可能性を他者  
との差異、関係に見出したフ  
カンやデリダ(II章)。無知  
のベール、原初状態という方  
法論にもつき、私、汝とは  
別の位置にある正義を直截的  
に掲げたロールズと、そうし  
た第三項の可能性を認めなが  
ら、他者からの要求に常に狼  
狽せざるをえなかったレヴィ  
ナス(III章)。だからこそ、二  
元的視点と三元的視点をとも  
に重視するミードの「遠近法  
的展望」には批判的に継承す  
るだけの理論的、実践的な意  
義があると、著者はいうのだ。

以上のようにみると、本書  
の意義は、解釈学の伝統から  
具体的な社会領域へと考察を  
広げながら、理解という実践  
的な要請のもとに思想史を組  
みなおしたことにあるといえ  
るだろう。近代、あるいは啓  
蒙の時代は、個人の理性の力  
を称揚する一方で、その時代  
このプロジェクトを権力や  
法、道徳などに細分化させる  
ことで、むしろ主体の可能性  
を狭めてきた(13頁)ともい  
える。だとすれば、権力が人  
間社会に対して大いなる危険  
を秘めているのを認めざるを  
えないとしても、だからこそ、  
権力の解釈学―他者理解とい  
う問題の及ぶ射程は、近代社  
会において主体であり、他者  
を認めるための可能性の一つ  
として理解されるべきだろ  
う。限られた思想家を取り上  
げることで、「理解」につい  
ての思想史的な解明がどれほ  
ど達成されたのかという人が  
いるかもしれない。だが、そ  
れは、他ならぬ読者自身にと  
つての実践的な課題でもある  
ということを忘れてはならな  
い。われわれの日常生活に潜  
む暴力的な関係にはじまり、  
テロや紛争といった直接的な  
力の行使、そしてそれへの処  
方箋に至るまで、他者理解の  
射程をあらためて問い直すた  
めに必携の一冊。

(現代位相研究所首席研究員)



固定的な支配関係に陥る可能  
性が常にある。しかし、問題  
はこれらの支配関係が暴力的  
であるだけではない。その暴  
力は男女、貧富、友敵といっ  
た三元的な、私と他者との関  
係それ自体の困難に由来して  
いる。だから、ミードにおい  
ては、三元的構造を暴力化さ  
せないような、遠近法的展望  
が実践的に必要とされるの  
だ。むろん、われわれは必ず  
しもミードばかりに頼る必要  
はない。著者もいふように、  
ベンヤミン、アダム・スミス、  
デリダたちは、フロイト、ホ  
ッブズ、シュミットといった  
二元的構造の行き詰まりや暴  
力的関係を強調する論者との  
対決の中で、他者理解と権力  
の別様可能性を探求した思想  
家として位置づけることがで  
きる。